



SOTO ZEN JOURNAL

DHARMA EYE

News of Soto Zen Buddhism: Teachings and Practice

英語翻訳版『伝光録』発刊にあたり p1
大谷哲夫

認可専門僧堂設立事業並びに天平山菩提心寺建立
～北米曹洞第一道場を目指して～ p2
秋葉玄吾

世界仏教徒会議・世界仏教徒青年会議日本大会について p4
村山博雅

曹洞宗の坐禅観『普勧坐禅儀』を学ぶ (1) p7
菅原研州

坐禅への脚注集 (14) p11
藤田一照

法
眼

Number

41

March 2018



英語翻訳版『伝光録』 発刊にあたり

編集委員長 大谷哲夫
曹洞宗宗典經典翻訳編集委員会

1996年に曹洞宗宗典經典翻訳編集事業が組織されて以来、2001年8月には『曹洞宗日課勤行聖典』を、また2010年1月には『曹洞宗行持軌範』を翻訳出版いたしました。そしてこのたび、太祖瑩山禪師が説示され、長年に渡って弟子たちにより相承されてきました『伝光録』の英語翻訳版が完成し、昨年11月27日には、それを記念したシンポジウムを東京グランドホテルにおいて開催しました。

1960年代以降、日本国外において曹洞禅を実践する人びとが増えていくなかで、道元禪師や瑩山禪師の主な著作は英語圏を中心に多少のものが翻訳、出版されました。しかし、その多くには注釈が少なく、正しく理解、解釈するための内容が十分とは言い難いものでもありました。曹洞禅を正しく伝え、各禅センターの講義や大学などの授業においても、広く展開し続けるには、原文の言語に忠実で信頼のある学問的理解に基づき的確に翻訳され、学術的な視野に照らし合わせても堪えうるテキストが必要であることは自明の事実です。このような状況により、本事業が組織され、今日まで継続されてきました。

『伝光録』は道元禪師の『正法眼蔵』とともに曹洞宗の根本宗典であり、釈迦牟尼仏よりインド二十八代、中国二十三代を経て、道元禪師、懷奘禪師に至る一仏五十二祖に単伝される悟道

の因縁を取り上げて提唱説示された、稀有の祖録であります。

宗務庁版『伝光録』が平成2005年に刊行されたのを機に、これを底本として英語翻訳が開始されました。翻訳作業はウィリアム・ボディフォード先生を主として、故ジョン・マクレイ先生、サラ・ホートン先生たちがそれに加わり、グリフィス・フォーク先生が編集長の任にあられました。

翻訳編集作業では日本語の原文と英訳を一文ずつ確認し、すべてが正確で理解できるように、必要に応じて修正を重ねていきました。英訳の仏教用語については、『伝光録』の本文中において、また可能な場合は翻訳作業中の『正法眼蔵』との間においても、一貫性を確かなものにするために標準化しました。

また、多くの脚注を掲載し、その中には仏教の伝承的知識や有名な機縁などについての説明、一般的でない仏教用語や教義についての解説、さらにこれまで明らかになっていなかった引用や文献についても、様々なデータベースを用いることで見つけ出し記載しました。

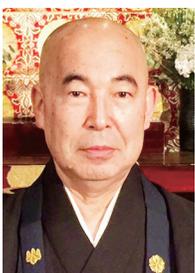
英語翻訳版『伝光録』は本文と用語集の2冊組となっており、用語集では『伝光録』に出てくるすべての名称（人物、場所、文献）と、仏教や特に禅の専門用語などを集録し、脚注としては長すぎる重要な用語、発想、隠喩、歴史的事項、原文における重要な点の詳細な説明を掲載しました。

出版までのレイアウト作業にはウルス・アップ先生にお力添えいただき、十余年にわたる膨大且つ精細な作業を経てこのたびの出版に至りました。この間にご逝去されましたジョン・マクレイ先生に対し、衷心より哀悼の意を表する次第です。

曹洞宗の根本宗典である『伝光録』の翻訳が出版されたことは、仏祖により相承されてきた正伝の仏法が海外において愈々興隆することを大いなる期待をするものであります。

また、本事業の開始以来翻訳に着手しております『正法眼蔵』につきましては、本年度をもって全巻の翻訳が完了する予定であり、来年度より編集並びに校正へと移行し、出版に向けて本事業を推進して参ります。

皆さまにおかれましては、本書を横参縦参し、また有縁の方々に普及されますことをお願いし、英語翻訳版『伝光録』発刊のご挨拶とさせていただきます。

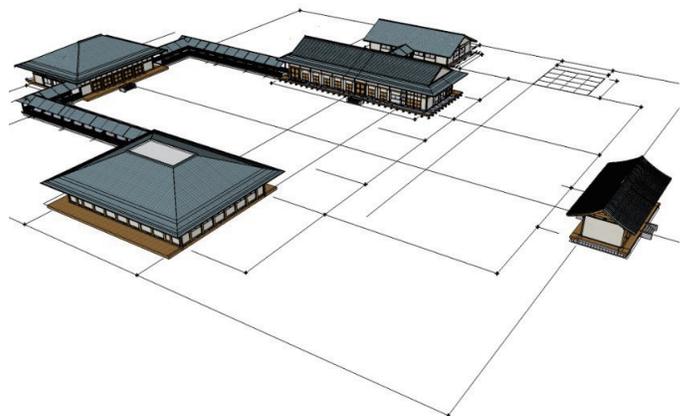


認可専門僧堂設立事業並びに 天平山菩提心寺建立 ～北米曹洞第一道場を目指して～

国際布教総監 秋葉玄吾
北アメリカ国際布教総監部

北アメリカにおける曹洞宗の国際布教は、2022年に100周年の大きな節目を迎えるにあたり、その記念事業の一環として、「天平山菩提心寺プロジェクト」を鋭意推進しています。カリフォルニア州レイク郡の13万坪の土地に、檜材を使用した日本の伝統的な木造建築による禅宗様式の伽藍の整った寺院、「天平山菩提心寺」は、宗門の国際布教の歴史で初めてとなる専門僧堂設置認可を目指すものであります。

当地における100年近きにわたる先人国際布教師の精魂の帰結として、専門僧堂設置の要望が彭拜として起きています。これはまた、永年の念願でもありました。



宗門の国際布教の歴史は、1903年にハワイとペルーへ宗侶が派遣されたことにより始まり、その後北アメリカにおいても、日本からの移民やその子孫を基盤とした日系寺院を中心に教化活動が盛んになされました。

1960年代に入ると、当時の北米開教総監部（現北アメリカ国際布教総監部）の主唱により、「開教師（現国際布教師）」による現地の人たちを対象とした参禅活動が活発になり、現地社会へ浸透していきました。

80を超える宗派がアメリカでは混在しており、1970年代半ばには20万人だった仏教徒は、現在では約300万人と推定されており、「アメリカの宗教」のひとつとして受け入れられています。ある調査によれば、「仏教に何らかの重要な影響を受けた」というアメリカ人は約2500万人、驚くほどの数に上ります。

仏教が欧米社会で広範に普及するようになった理由はいくつかありますが、その中でも、「自我の確立」が現代教育の眼目とされながら、自我により構築された個人である故に苦悩もまた多し、という人間性の領域から超脱し、他者共同体、人類、生態系、地球や宇宙との一体感を確立する必要性が大きくなり、仏教によってそ

れが可能となるものと光明を見出しているからです。

ことに「只管に坐ること」が人類の苦悩を最も簡潔に救済する根本的な実践法であるという理解がなされているのです。言葉を変えるならば、それは「仏陀や祖師方の教えを理屈なしに自覚させてくれる実践である」ということでもあります。

その様な理解認知の背影により、日本国外における広がりには近年特に目を見張るものがあり、現在、曹洞宗の僧籍を有する者は約400名、寺院・禅センターは300箇所を超えるまでになりました。日本の専門僧堂、宗立専門僧堂での安居を修了し、教師補任される僧侶が陸続と生まれており、さらに国際布教師の新規任命や海外特別寺院の登録なども増え、結制安居も修行されるようになりました。

この様な宗勢にともない、海外の曹洞宗社会においては、後継者の育成が重要な要請、課題となってきました。

一仏両祖のみ教えに基づく曹洞禅が、なぜ欧米人の宗教心に浸透するのかを申し述べますと、「只管打坐・Just Sitting」は、一個の生命体は地球、宇宙の悠久の生命と連鎖した真理の体現であるという確固たる事実を、明晰に覚醒させる働きがあり、人間活動が本来あるべき姿を自覚することを促す力を内包していると捉えられているからです。また、私たちが恩恵に浴している高度に発達した21世紀の文明における最大の課題である、「持続可能な資源、環境、生態系を如何に保持していくか」についても、一仏両祖のみ教えの中に、その難題を基本的に解く鍵のありかを気付かせる、非常に現代的な言葉がいくつも見出せるとされています。

私は、これを正しく伝える現地の宗侶を育成することが、宗門の国際布教の将来的展望にとって喫緊の重大事であると思慮いたしております。日本国外において、曹洞禅は国家や地域の歴史、文化、気候、風土、生活習慣に順応しながら展開されており、その多様性は曹洞禅の新しい相貌を顕すのではないかとの期待をもたせる、大きな魅力でもあります。

しかしながら現時点においては、仏祖単伝の正法、只管打坐、即身是仏、禅戒一如、修証不二の妙諦を正しく伝えることが肝要です。そして、宗侶として身に備えておくべき「威儀即仏法、作法是宗旨」を日常的に体現する基本進退や威儀、鳴らし物などの共通事項を実践的に指導することもまた重要なのです。これらは、日本国外に展開する曹洞禅社会に対し宗門が遂行しなければならない責務であるでしょう。

この宗門の宗旨や伝統を現地の言葉で正しく伝え、綿密な行持を履踐するための修行道場、それが「天平山菩提心寺」です。

800年の伝統を誇る日本の曹洞宗畢生の大事でもある本事業が完遂すれば、宗門古来の行学を修することが可能となり、「行によって證入す」の正伝の仏法を世界各国へ伝える基盤を築くことに繋がります。

更には、「天平山菩提心寺」を拠点として多くの日本人僧侶や外国籍僧侶が往来することで親しく交流が可能となり、全世界に広がる曹洞宗の将来にとって、多様性に富む豊かな人材を輩出する有益性を生み出します。社会・世界に対し「開かれた曹洞禅」の無限の可能性を追求する、力強い宗門への変貌を遂げるきっかけを作り、大いなる裨益をもたらす財産となるものと確信しております。

宗門各御寺院様におかれましては、何卒「天平山菩提心寺」創設の趣旨をご理解いただき、物心両面にわたるご助力やご支援、ご加担いただけましたならば、これに過ぐる喜びはありません。何卒、ご法愛、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



世界仏教徒会議・世界仏教徒青年会議日本大会について

村山博雅

曹洞宗国際布教審議会委員

世界仏教徒青年連盟WFBY会長代行

平成30年11月5日～9日の5日間、「世界仏教徒会議・世界仏教徒青年会議日本大会」が公益財団法人全日本仏教会の主催で開催され、11月9日には大本山總持寺において記念法要が予定されています。

この世界大会の母体組織である世界仏教徒連盟（World Fellowship of Buddhist 以下「WFB」）は、昭和25年に日本を含むアジアの仏教国を中心に設立された仏教徒による国際ネットワークであり、現在では欧米を含む世界各国の仏教会が加盟する世界最大の国際仏教会です。日本では、曹洞宗が加盟する全日本仏教会（以下、「全仏」）がこのWFBに参画し、唯一の日本センターを務めています。

また、世界大会の青年部を組織する世界仏教徒青年連盟（World Fellowship of Buddhist Youth、以下「WFBY」）とは、昭和47年にスリランカで開催されたWFB世界大会で設立が正式に承認され、世界最大の青年仏教徒国際ネットワークとして活動を展開する団体です。全国曹洞宗青年会（以下「全曹青」）が加盟する全日本仏教青年会（以下「全日仏青」）がWFBYに参画し、全仏と同じく唯一日本センターを務めています。

私自身は平成23年から6年間、全曹青より全日仏青に出向させていただき、さらにはWFBYに出向してまいりました。ここでは、来年開催

される世界大会に向け、青年会一丸となって取り組んできた仏教国際交流活動について少し述べさせていただきます。

全日仏青は全曹青他、12の加盟団体で組織され、WFBY日本センターを担い、加盟団体の責務として、全世界の仏教青年会との交流を深め、仏教文化の宣揚と世界平和の進展に寄与することを目的とした国際活動に参加協力しています。特に最近では、日本仏教界が全力をもって取り組んできた「国際布教」「国際ボランティア」を視野に入れた「国際交流」をコンセプトとし、全日仏青は全曹青とともに様々な国際交流事業に参画し、企画立案してまいりました。

日本がこの国際交流活動に参加する意義を深く考慮し、日本仏教のさらなる理解を得るための国際交流と広報、並びに海外における国際的な仏教活動・支援活動への積極的参加、その活動を円滑にするための、次世代を担う人材の発掘と国際感覚を備えた人材の育成に努力しています。アジア伝統仏教会との繋がりが生む日本仏教の将来的可能性と、未来の日本社会と仏教会に切望される国際化を見据えた国際交流活動に邁進しています。

具体的には、各国で開催される世界大会をはじめ、タイのマガブチャ祭（万仏節）、マレーシアのウェサーク祭（釈尊の降誕・成道・入滅の日）、スリランカのペラヘラ祭（仏舎利の祭祀）等の各国での事業への協力参加、国際仏教徒青年交換プログラム、国際仏教徒指導者研修やフォーラムの企画協力など積極的に参加します。一昨年のネパール地震災害においてはその支援活動として、WFB・WFBY共催のWorld Buddhist Kitchen(WBK)の炊き出しをはじめとする現地支援に努めました。



ネパール支援

さらに特筆すべきところは、WFBY最大の継続事業である、各国の青年仏教徒の国際交流と相互理解を目的とした「国際仏教徒青年交換プログラム International Buddhist Youth Exchange (IBYE)」をこの5年で3度も日本に誘致し、開催させていただいたことです。

平成25年8月には、東日本大震災復興支援として福島県いわき市にて「Crisis Management IBYE Japan2013」を日本国内の仏教会や支援団体協力のもと開催し、被災地内外の日本の学生とWFBY各国代表参加者が集結しました。世界中で風評被害を受けた福島県と日本について、現地の方がたによるレクチャーを受け、直接交流することによって、被災地の復興、放射能に関わる課題、様々な切なる思いを学生が経験として記憶し、海外からの参加者が日本の学生とともにその事象を正しく理解し、国際社会に広く発信する機会となりました。

平成27年3月には、京浜4大本山を巡り、アジア諸国より注目を集める日本独特の「宗派仏教」についての理解を促すことを目的に、「Discover Japanese Buddhism IBYE Japan 2015」を東京・神奈川で開催しました。各宗派の法要参加、レクチャーに加え、特に大本山總持寺では「全国徒弟研修会with国際子ども禅のつどい〜

未来へ向けての「大いなる足音～」と合流し、修行体験、国内外参加者による共同制作を行い、日本仏教の特色をアジア諸国へさらに大きく発信することができました。



国際仏教徒青年交換プログラ2013

そして昨年3月、東日本大震災物故者追悼慰霊7回忌と復興祈願の祈りを込めて「Compassion in Practice-Walking Dharma Together-IBYE Japan 2017」を、宮城県仙台市で開催いたしました。震災以降6年間継続して行われている僧侶による支援活動と、その経験によって培われる日本仏教者の意識を国内外の参加者が学びました。

さらに、海外ではあまり目にすることがない、僧侶自身が支援活動に自ら参加し、僧侶が集団として現地での直接的支援活動に取り組むという、日本仏教独特の貴重な特長を、改めて世界へ発信することができました。この国際仏教徒青年交換プログラムを頻繁に開催させていただいた結果として、各大学の仏教青年会が中心となり全日仏青主導で念願であった青少年国際交流グループ「クラブ25ジャパン(Club25 Japan)」が組織されました。

さて、昭和39年の東京オリンピック開催時における訪日外国人数が年間35万人であったのに対し、平成28年はアジア諸外国を中心に2400

万人の外国人が訪日しました。海外在留邦人数は、インターネットの一般普及が始まりグローバル化という言葉が日本で定着したといわれる平成8年で60万人弱であったのに対し、平成28年には130万人超まで増加しています。

2020年開催の東京オリンピックを契機に、今後さらに加速すると推測される日本社会の国際化は、世界経済における各国の立ち位置の転換に伴うアジア諸外国資本の日本への流入、日本からアジア諸国への移住者の増加、また、インターネット環境による情報のさらなるボーダレス化等と相まって、アジア諸国との経済、政治、文化の緊密化を促し、その価値意識をも共有化していくであろうことは想像に難くない事実です。

今だからこそ、このアジア仏教国を中心とした世界最大のネットワークであるWFBYやWFBへの事業参画は必要不可欠であり、日本仏教界にとって大変重要な意味を持ちます。アジア諸国における盤石たる日本伝統仏教のブランドをさらに構築しなくてはならないことは自明のことながら、特に、瞑想を当たり前とするアジア諸国仏教界が相手であるからこそ、他国の瞑想法との比較の上、欧米を含む世界中から注目される「禅(ZEN) Japanese ZEN Buddhism」の最大の敷衍者として、曹洞宗が担う役割は多大なるものと確信しています。

来年の世界大会へ向け、全曹青と全日仏青はこの国際交流に尽力してまいります。御尊董各位におかれましては、今後とも変わらぬ御法愛とともに、さらなるご理解ご協力を賜りますれば心より有り難く存じ上げる次第です。何とぞよろしくごお願い申し上げ、仏教国際交流活動と世界大会に関する、ご報告とさせていただきます。



曹洞宗の坐禅観 『普勸坐禅儀』を学ぶ(1)

准教授 菅原研州
愛知学院大学教養部

道元禅師の著作で、曹洞宗の坐禅の根本聖典『普勸坐禅儀』（流布本系統）について、今後数回に分けて話を進めていきたい。また、予め申し上げておけば、祖山本『永平広録』の訓読に従って読み込み、それによって宗旨を把握してみたい。

内容は、江戸時代以前の註釈書に依りつつ、道元禅師の他の著作を読みながら全体を把握することにしたい。よって、これにより従来いわれてきたことと異なる内容になるかもしれないことも合わせてお断りする次第である。

なお、従来の区分の方法では、流布本系統が持つ四六駢儷体の構造から、全16段に分ける場合もあった（秦慧玉禅師『普勸坐禅儀講話』など）。小生も、その方法が良いとは思っている。ただし、今回は記事が掲載される回数に応じて文章を区切り、その上で小生なりの参究成果に基づき解説を付すこととしたい。

そこで、参究に当たっては、基本的に江戸時代の学僧である瞎道本光禅師『永平広録点茶湯』に見える『普勸坐禅儀』註釈を中心に、合わせて、面山瑞方禅師『普勸坐禅儀聞解』、指月慧印禅師『普勸坐禅儀不能語』、そして、各種『永平略録』註釈を調べながら、学んでいきたい。これらは、江戸時代の学僧達による、同書参究の結果であり、道元禅師の語録に入る『普勸坐禅儀』註釈もまた参照すれば、これまで坐

禅関係の註釈が知られていなかった人であっても、それを知ることが可能であるので、合わせて見てみるのである。

ところで、本文に入る前に、『普勸坐禅儀』の本質を一言でいえば、「道本円通」なのである。つまりは、我々自身の身心に、既に仏陀の「道（さと、教え、経）」は本より円通している。だが、そうであるならば、何故に修証していく必要があるのか？あるいは、その時の修証とはどうあるべきなのか？それらの問い掛けこそが、『普勸坐禅儀』の参究を、そして我々自身の坐禅そのものを押し進める最大の源泉となる。それは常に念頭に置いておかねばならない公案であるといえる。

普勸坐禅儀

観音導利興聖宝林寺 沙門道元 撰

まずは、このタイトル自体が大きな問題である。いわゆる「普勸坐禅儀」とは如何なる意味であるのかを参究しなくてはならない。瞎道師は、普勸にはその人個人の状況や才能、そういう相違があっても、この「勸」からは免れることが出来ないことを力説されている。そして、問題はただ「坐禅の儀式」を伝えるだけを意味していると理解してはならないということだ。それは、瞎道師が「参同の坐禅に兀兀地なるべきの宗なり。もし勸化・教化のころ、儀式のみにてはあらず。即不無の修証を染汚不得なる仏光明の親曾なり」と述べられるところに究尽されている。つまり、坐禅の儀礼・技術のみに陥れば、そこに「普」はなく、どこまでも、その「普」とは仏の道理として会得されねばならない。だからこそ、「染汚不得なる仏光明」なのである。道元禅師が「仏」を用いる場合、そこ

には必ず「無分別」の意が込められている。その「無分別」を分別するのが凡夫なので、その我見を破ることは、誰にとっても必要である。そして、仏光明に摂取される坐禅を正しく伝えなくてはならない。それが「普勸」なのである。なお、「坐禅儀」については、以下に読んでいく本文、あるいは、瞎道師が指摘されるように『弁道法』『弁道話』なども合わせて見ていくと良いだろう。「坐禅儀」「坐禅箴」巻も参考になることは言うまでも無い。

さて、続けて、「観音導利興聖宝林寺 沙門道元 撰」という記述からは、この流布本『普勸坐禅儀』が、道元禅師が興聖寺におられた頃に成立したことが分かる。それを前提に、他の諸著作との前後関係を探ってみたい。

1236年10月15日	興聖寺で集衆説法
1242年3月18日	「坐禅箴」巻を興聖寺で書く
1243年7月16日	越前へ向かう
同年11月中	「坐禅儀」巻を吉峰寺で示衆
1244年2月15日	「三昧王三昧」巻を吉峰寺で示衆

このような流れになっている。そうすると、「坐禅儀」巻は、明らかに『普勸坐禅儀』よりも後で書かれたことになる。また、「坐禅箴」巻は、流布本『普勸坐禅儀』との関係は微妙ではある。だが、小生は道元禅師がご自身の著作の中で、「試作的思索」を用いるとされていて、「流布本」へと練り上げる過程に、「坐禅箴」巻があり、その前提としての「古鏡」巻、展開としての「行持」「光明」巻があったと考えているので、おそらく「流布本」の方が、「坐禅箴」巻よりも成立は遅いと思う。「坐禅箴」巻の成果を受けて、改めて文体を調べて示したのが、「流

布本」なのではなかろうか。また、興聖寺の寺号（寺の名前）についての研究は、面山師『聞解』の記述が優れていると思うので、それを参照したい。

原れば夫、
道本円通す、争んぞ修証を仮らん。
宗乘自在なり、何ぞ功夫を費やさん。
況んや、
全体廻かに、塵埃を出たり、孰か払拭の
手段を信ぜん。
大都、当処を離れず、豈、修行の脚頭を
用いん者や。
然而ども、
毫釐も差有れば、天地懸隔なり、
違順纒かに起れば紛然として失心す。

最初の2行だけで、かつて1本の論文が書かれたことがあるけれども、ここは古来より学僧達が最も気を配って提唱した文章である。決して、軽々に扱って良い内容ではない。そして、これらは「道本円通」から「失心す」までを一つとして考えなければ、必ず誤ってしまうので、敢えてそれらをまとめて考えてみたい。

まず、冒頭2行で示されているのは、まさしく道元禅師の坐禅観・修証観が「本覚門」の立場にあることを明示する内容である。この我々の世界は、仏道も、宗乗も、円かに存在しており、それを証するための修行などは最早不要である。また、その全てがあらゆる汚れを脱落しており、それを改めて拭き取ることも無いし、仏道の肝心要の場所から離れることが無いので、修行して仏道を証していく必要も無いのである。

問題は、このような本覚門、つまりは本から悟っているという事実が先にあって、それが我

々の現実にどう影響してくるのかである。その部分に、ほんの少しでも思い違いがあれば、仏祖の道理とは天地ほども違ってしまおうし、混乱して仏心を失ってしまうのである。そうであるならば、思い違いが無い状況をどのように会得すれば良いのだろうか。

瞎道師の指摘では、この「争んぞ修証を仮らん」「何ぞ功夫を費やさん」についてはそれぞれ「修証一等」のことだとしている。修証一等を、仏の道理や悟りの側から記述すれば、「どうして修証する必要があるか?」「何故弁道工夫する必要があるか?」となるという。だが、そこに、修行がないわけではない。つまり、道本・宗乗の自在円通なる状況が強調されるからこそ、そこに倦まれることなき修行もまた道本・宗乗の自在円通となっていく「修証一等」なのである。

いわば、「修証一等」が正しく把握されること無き状況で、『普勸坐禅儀』を読んでも、修行或いは証悟、そのどちらかに墮してしまう危険性を、瞎道師は指摘されるが、それはまさしく道元禅師がおっしゃることと同じであって、現代の我々もそれを正しく受け取っていかねばならないのである。そして、用語としては出ないけれども、瞎道師の指摘は「本証妙修」にまで進んでいる。それはつまり、如何に悟りなどの円通が強調されても、その上での修行が必ず行われなくてはならないことを意味している。然るに、その「修行」の実践については、やはり良き師匠に就いて、その生き方を真似ねばならないという。悪しき師匠に就いては、日頃の行いはただの悪作・悪行であって、仏行では無い。

我々は「本証妙修」や「道本円通」などと聞くと、すぐに、「どんな生き方でも道本か」と

考えてしまい、「道本円通ならば修行は不要か」というような発想に至る。だが、その発想そのものが既に、現実を離れた抽象化された議論であって、まさしく空想妄想・脇稼ぎの最たるものだ。ここには、修行が正しく行われている、という「前提」があって初めて言われることであり、その「修行」と「証悟」とがどういう関係にあるのかを示すための教え、それが『普勸坐禅儀』である。いくら修行しても、証悟に至らない、そのような無駄な行いを避けるため、両者の関係性を、「不染汚（無分別）の修証」に則って示すこと、それが本書の意義である。この前提をせずに、無闇に混乱することは無い。日頃の修行、それがあつたことを前提に考えて良いのである。なるほど、本書は確かに「初心者」向けでもある。だが、本当の意味で初心者向けに改められたであろう「坐禅儀」巻では、この冒頭の修証観に関する説示は割愛されている。その御慈慮もまた、児孫は正しく受け取っていくべきである。『普勸坐禅儀』とは、あらゆる衆生のために示された文献ではあるからこそ、初心者から臘高年長の者に至るまで全てを含むのである。初心者にはまず、仏の道理とは得やすいものだが注意が必要だと示し、臘高年長の者には「本証妙修」の本質である「しるべし、修をはなれぬ証を染汚せざらしめんがために、仏祖、しきりに修行のゆるくすべからざるとをしふ」（『弁道話』）を冒頭で示しているのである。なお、今引いた『弁道話』の一節を正しく理解できないと、「本証妙修」も誤る。修行を緩くして良いとは、どこにも書いていない。修行を厳しく行うこと（これは、肉体的・精神的な追い込みを前提にしていない。動機を正しく得て、日常を規則正しく生きることをいう）が肝心なのである。

ここが正しく得られれば、本文の全体が容易に会得できるであろう。

直饒、
会に誇り悟に豊かに、警地の智通を獲、
得道明心して、衝天の志気を挙げ、
入頭の辺量に逍遙すと雖も、
幾くか出身の活路を虧闕せる。

矧んや、彼の祇園の生知たる、端坐六年
の蹤跡見るべし、
少林の心印を伝えし、面壁九歳の声明、尚
聞こゆ。
古聖既に然り。
今人、盍ぞ弁ぜざらん。

とりあえず、このような一文を挙げてみた。この部分について一言でいえば、「大悟という魔境」からの脱却を考えていることになる。前項に於いては、道本円通を誤解しないように明記されているが、そこから「行」へと展開されていくのが、この箇所である。これは、現在の曹洞宗でも同様で、非常に憂慮しているのだが、道元禅師は「大悟（或いは己事究明などという人もいるし、見性という人もいる）」に重きを置かない。頭から全てを否定しているとは思えないのだが、取扱いが注意される。

その最たるものが、この最初の2行である。つまり、多くの法会に参随し、悟りも豊かに得ていて、警地（ちらりと真実を垣間見ること）の智通を得、或いは仏道・仏心を得たとして、天を衝くほどの志を挙げたとしよう。だが、それは所詮、真実によく入ったばかり、そのほとりをウロウロしているだけであって、むしろ、自分がわずかに得た境涯に満足すれば、「出身の活路」を失ってしまうのである。この「出身の活路」とは、世間的な様々な評価などを、一気

に跳び越えて真実の世界に入ることを意味している。言い換えれば、「一超直入如来地」となる。なお、譬え、如来地に入ったとしても、そこで終わったのであれば、それは「魔地（修行を止めてしまう場所）」なのである。

確認だが、前項で指摘されたことは、「修証一等」を正しく把握すること、であった。そうであれば、ここはその「修」の正しい会得を求めているといえる。それが、後半部分である。ここでは、祇園の生知（つまりは、生まれながらに仏道を得ていた仏陀釈尊のこと）が端坐六年の修行を行ったという勝れた跡形を見るべきであり、また、インドで仏心印を得て、それを中国に伝えた達磨が、少林寺で九年面壁坐禅したという勝れた名声をも良く聞くべきであるという。これらは、ともに、「悟りを得るための坐禅」ではなくて、既にそれが明らかだという事実の上で、証上の修として行われた坐禅を意味している。

ただこれ坐禅を身心・依正・国土としたまえる仏祖を印証するなり。

瞎道本光禅師『永平広録点茶湯』

坐禅は、我が身の坐禅とのみ思う人には、この一文は理解できまい。しかし、「依正」となっている。坐禅は環境（依報）であると同時に、我が身（正報）である。そして、我が身心であると同時に、国土である。これは、坐禅自体が、我々自身の存在そのものであると同時に、その存在の根拠になっていることを意味している。それは、坐禅自体が修証一等であるため、修が現実、証が根拠である。その意味で、次の一文を読むと会得し易いであろう。

ここをもて、釈迦如来・迦葉尊者、ともに

証上の修に受用せられ、達磨大師・大鑑高祖、おなじく証上の修に引転せらる。仏法住持のあと、みなかくのごとし。

『弁道話』

釈尊・迦葉尊者も、或いは達磨大師・六祖慧能も、ともに「証上の修」に用いられ、導かれたからこそ、仏法を正しく住持したのである。我々はその跡形を慕い、今の我々もそれに倣うべきだと言える。要するに、たとえ「大悟」したとしても、それで修行を終えるようなことになれば、結局は修行の退転となり、魔地・魔境に落ち込むのである。だからこそ、大悟の有無を問うのではなく、修行の有無をこそ問うべきだといえる。日夜、参究に勤しむ状況が肝心なのである。

我々は、修行というと、どこまでいっても、悟りを得るための手段とのみ考えて、一定の境涯などを得るべきのみだと考えてしまう。だが、道元禅師は「おほよそ諸仏の境界は、不可思議なり」（『弁道話』）であるとされ、或いは、「識るべし、行を迷中に立て覚前に証を獲る」（『学道用心集』）であり、或いは、我々の弁道とは「朕兆已前の公案なり、未だ大悟を待たず」（『弁道法』）である。このように、修証は常に不染汚（無分別）として、一等に示されている。そのことをよくよく会得されるべきなのである。つまり、「証」を明らかに得たいのであれば、我々自身の境涯や心識レベルでの会得に収まるのではなくて、ただ行の有無をのみ問うべきなのである。

そのことを、今回紹介した箇所は力説しているのである。

（次号に続く）



坐禅への脚注集 (14) 我と大地有情と同時呼吸す (1)

藤田一照

曹洞宗国際センター所長

センサリー・アウェアネス (Sensory Awareness) と呼ばれるソマティック・ワークの名付け親であるシャーロット・セルバー (1901～2003) さんの本を読んでいたらこういう一節に出会った。彼女が1966年にニューヨーク市で行った呼吸をテーマにしたワークショップでの発言である。

「水辺で生い茂っている植物を撮ったこの写真を見てごらんください。その力強さ、多様さに魅了されませんか。そこでは、植物と一緒に、水、石、大地、太陽の光、日蔭、……そういったものすべてが渾然と一つに融け合っているでしょう。この写真は、自然の中では何一つとして孤立したものはないことを雄弁に物語っています。わたしたちもまた、周囲の世界から切り離されて存在しているわけではありません。呼吸というプロセスも、植物が周囲のすべてと結びついているように、わたしたちの内外で起きていることのすべてと結びついているのです。……」

わたしはこの一節を読んで、釈尊が樹下で打坐している姿を思い起こした。釈尊はまさにここでシャーロットさんが言っている水辺に生える植物のように、すべてのものと渾然と融け合って坐っておられたと思うからだ。大きな樹を背にして、大地にしっかりと根を下ろし、体幹をゆったりと立て、空気を自由に出入させ、すべての感覚器官を静かに澄ませて、自分の内外で起きていることにはっきりと気づいていて、まわりにいる動物や植物、そして山や川や空や

星といった自然界のすべてが打坐の内容になっている…、それはまさに尽十方の世界を自分の真実の身体として親密に受用している状態である。道元禅師の表現を借りれば、自己が「万法に証せられている」あり方と言えらるだろう。このような「世界に開かれている打坐」というものが、人間の歴史の上でいかに革命的なものだったかをわれわれはよくよく参究しなければならないと思う。

これまでの論考ですでに述べたように、釈尊が出城後にまず徹底的に試みた修定型の瞑想（「習禅」）や苦行はいずれも、苦しみに満ちたこの現世（俗世の現実）からなんらかの形で離脱するための方法であった。今生きているこの現実の世界から逃げ出すことこそが救いであるという救済論（soteriology）の枠組の中では、現世にあるものはすべて脱出・逃走の際の束縛、重荷、足枷、邪魔物であるとされる（身体もその例外ではない。身体こそわれわれをこの世にたなぎとめる最大のものだからだ。苦行の発想もここから胚胎してくる）。したがって、宗教的な修行の目的は、必然的にそれらとのつながりを断ち切ることにならざるを得ない。宗教として確立した仏教もキリスト教もこの点では原理的に同じ地盤に立っているのではなからうか。どちらの宗教伝統においても、宗教的エリートつまり僧侶や修道士とよばれる聖職者は世俗を離れて家族や所有物を持たず、禁欲と清貧の道を歩んで、身体に根を持つあらゆる欲望を超克しようとして生涯を賭ける人々であるからだ。そこでは最終目的地は、涅槃にしろ天国にしろ、ここではないどこか、今ではないいつか、として構想されている。俗と聖、此岸と彼岸、現世と来世…といった二つの世界が対置されているのだ。

しかし、その伝統の創唱者であるとされる釈尊やイエス自身ははたしてそのような二元的な立場に立っていたのだろうか？もしかしたらそうでは

なかったのではないか。むしろ二人ともそのような枠組みをこそ乗り越えようとしたのではなかったのか。釈尊は縁起の教えによって、イエスは神の愛を説くことで。なぜなら、どちらも、分離・切り捨てるの教えではなく、関係・つながりの教えだからである。そして二人とも来世ではなく「今、ここ」の生を充実して生きることを強調したのではなかったろうか。それがどちらも「仏教」とか「キリスト教」という「宗教」としての体裁を整えてくるにつれて、様々な事情によって、創唱者のもともとのメッセージとは逆の現世否定的な教えが主流を形成するようになった…これはまったく見当違いの見方だろうか？

それはともかくとして、現世の否定・現世からの離脱—これが当時のインドの主流の宗教的エートスであった。釈尊もそういう文化的枠組みの中に生れ落ち、当然のことながら出家後もその枠内で思索し実践していたのだが、やがてこの枠組み自体がそもそもの問題であるという洞察を得るにいたった。そして、その枠組みの中では自らが抱えている実存的問題を解決することが不可能であることを見極め、その外へと大きくかつ全く新しい一步を踏み出したのである。そこにこそ仏教の革新性を見るべきだというのがわたしの個人的な見解である。

この革新的な一步が具体的な形をとったのが「樹下の打坐」であった。苦行から打坐へ、それは、それまでのような「現世からの逃避」とは真反対の「現世への落着」という方向転換、パラダイムシフトである。現世に対して「逃げ腰」、「及び腰」になるのではなく、現世にしっかりと足をつけ、そこで「腰を入れて」生きようという人生態度の決定（けつじょう）があのような打坐として受肉、結実したのだった。ここで、伝統的な枠組みの中での懸命の努力がすべて行き詰った果てに釈尊が成し遂げた、苦行から打

坐へのこの根本的な局面の打開の様子をもう少し具体的に検討してみよう。

釈尊は、苦行中は断食か極端な少食という形で食べ物に対して否定的・拒否的な態度を取っていた。しかし、仏伝によれば、樹下に打坐する前に、釈尊は村娘スジャータの供養する乳粥を受け取って食べたと言われている。そのおかげで衰えた体力を回復できたのである。釈尊と苦行をともに行っていた仲間たちは、それを見て「ゴータマは苦行に耐え切れず、苦行を放棄した、苦行から逃げ出した」と思って失望し、彼の元を去っていった。実は釈尊は「耐え切れなかった」から苦行を放棄したのではなく、それが真の解決の道ではないことを見極めたからこそ苦行を手放したのである。長年にわたって熱心にやってきたことが無効、無益であると知ってきっぱりやめることは実は勇気の要る決断である。しかし、現世否定の枠組みの中にいる人の眼には、それがさも墮落や退歩であるかのように映ったのも無理はない。アッシジのフランシスコは食べ物に灰をかけて、わざわざまず

い味にしてから食したと言われているし、確か鎌倉時代の明恵上人にもそのような逸話があったと記憶している。苦行者的なメンタリティは洋の東西を問わないようだが、イエスや釈尊の食べ物に対する態度はそういうものではなかったのではないだろうか。

スジャータから布施された乳粥をありがたく受け入れたとき、釈尊の食べ物に対する態度は根本的に変わっていたのである。苦行を離れることで食べ物の持つ意味がまるっきり変わった、だからこそ、俗世から供養される食べ物を、罪悪感なしに感謝して素直に受け取れたのである。われわれが行鉢の時に唱える「粥有十利 饒益安人 果報無辺 究竟常樂」とか「三徳六味 施佛及僧 法界有情 普同供養」、五観の偈の中の特に「二つには己が徳行の全歛を付って供に応ず」、「四つには正に良薬を事とするは形枯を療ぜんが為なり」、「五つには成道の為の故に今此の食を受く」といった文言には、この時スジャータの供養を悦んで受け取った釈尊の心根が脈々と引き継がれていることを感じるのである。(続く)

国際ニュース

ヨーロッパ国際布教総監部現職研修会

期日：2017年9月29日～10月1日
会場：フランス共和国 禅道尼苑

ハワイ管内布教師秋季定例連絡会議

期日：2017年10月27日
会場：アメリカ合衆国 両大本山ハワイ別院正法寺

ハワイ国際布教総監部現職研修会

期日：2017年10月27～29日
会場：アメリカ合衆国 両大本山ハワイ別院正法寺

英語翻訳版『伝光録』出版記念シンポジウム

期日：2017年11月27日
会場：東京グランドホテル

南アメリカ国際布教師会議

期日：2017年11月29日
会場：ブラジル連邦共和国 両大本山南米別院佛心寺

ヨーロッパ国際布教総監部主催協議会

期日：2018年2月2～4日
会場：フランス共和国 禅道尼苑

ハワイ管内布教師春季定例連絡会議

期日：2018年2月24日
会場：アメリカ合衆国 両大本山ハワイ別院正法寺

南アメリカ国際布教師会議、並びに国際布教師研修会

期日：2018年3月13～14日
会場：ブラジル連邦共和国 フロリアノーポリス市

曹洞禅ジャーナル 法眼(年2回発行)

編集兼発行人 藤田一照

発行所 曹洞宗国際センター

Soto Zen Buddhism International Center

1691 Laguna Street, San Francisco, CA 94115 Phone: 415-567-7686 Fax: 415-567-0200